

## 平成30年度 第3回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成31年2月6日（水）13時30分～15時00分
- 2 場 所 みんなの森 ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオ
- 3 出席者 柴橋市長、早川教育長、横山委員、川島委員、足立委員、武藤委員、伊藤委員  
（※会議構成員全員が出席）
- 4 招聘者 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授 内田 良氏
- 5 傍 聴 一般3名、報道関係者4名 （※公開で開催）
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ  
(2) 協議  
(3) その他
- 7 議 事  
(13時30分開会)

**○事務局** それでは、定刻となりましたので、只今から、平成30年度第3回岐阜市総合教育会議を開催いたします。進行を務めます教育委員会事務局次長の原と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、市長、教育長及び教育委員会委員5名の構成員全員が出席しています。また、招聘者として、名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授の内田良様に、ご出席いただいております。

本日の会議は、公開で行います。報道機関の方や一般の方がお見えになります。なお、本日は、小中学校の校長先生、健康部や子ども未来部の職員も参加させていただいております。また、本日の会議の議事録については、後日、岐阜市のウェブページにて公開することを予定しておりますので、ご承知おきください。

それでは、お手元の資料を確認させていただきます。次第及び席次表、内田様からご提供いただきました資料1、資料2は事務局の説明資料となっております。それでは、次第に沿って進めてまいります。

まずは、市長からご挨拶をお願いいたします。

**○市長** 皆様、こんにちは。第3回の総合教育会議の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。まず始めに、ご出席の教育委員の先生方には、日頃から情熱をもって、岐阜市の子供たちの教育のために、様々な角度からご指導、ご指摘いただきありがとうございます。

また、本日は、名古屋大学大学院の内田先生にもご出席いただき、子供たちの安全安心の視点からご教授いただけるということで、ありがとうございます。この1年間、子供の安全安心を脅かす事件や問題が全国で起きていると実感をしております。ブロック塀の問題や、夏の猛暑など、まさに子供の命に関わるようなことが起きており、学校教育の中で、子供の安全安心をどう確保していくか突きつけられた課題であります。さらには、登下校時に犯罪に巻き込まれる問題や、

家庭を見ても、先般も嘆かわしい事件がございましたが、虐待によって子供の命が奪われる等々、子供たちの安全安心を考えれば考えるほど、今の私たちの社会には課題が多いです。課題が多いということは、私たちが岐阜市の子供たちにできることもたくさんあるということです。

今日は、多角的見地から様々なアドバイスをいただき、子供の安全安心を岐阜市の教育立市としてしっかりと捉えてまいりたいと思っています。また、平成30年度の本会議では、幼児教育の充実、放課後児童クラブの充実と2つのテーマで議論を重ねていただきました。皆様方のこういった議論のおかげで、この両テーマについても、さらに充実拡大できるよう今準備を進めているところです。この総合教育会議で議論をし、様々なお知恵をいただきながら、どう具体的に地域の子供たちに届け、すべての皆様の安全安心につなげていくかにかかっていると思いますので、本日も皆様方の関連なご議論、ご意見をいただきますようお願い申し上げます、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいいたします。

**○事務局** ありがとうございます。次に、次第の2つ目になりますが、子供の安全安心の確保について協議を進めさせていただきます。本日は、内田様より、資料1に基づき、20分ほどご説明をいただきます。その後、事務局から資料2を7分程度でご説明いたします。それでは、内田様よりご説明をお願いします。

**○内田准教授** 名古屋大学の内田と申します。本日は、このような場にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。柴橋市長、早川教育長のご好意に預かりまして、本当にありがとうございます。本日は、学校安全について話に参りましたが、一番の緊急テーマが学校安全で、サブテーマとして大学図書館の研究を長らくやってきました。今年から国の研究費を頂き、公共図書館の研究を始めたばかりでした。こちらに招いていただき、先ほどご案内いただいて、すごいなと思いました。今までの図書館像は、いかに静かにいるかというものでしたが、今では、大学図書館も皆が語り合う場になっています。公共図書館はどうかかと思いましたが、こちらでは、すでに語り合う場が準備されているということで、非常に新しいなと感じました。また、是非こちらにも勉強をしに来たいと思っております。

スポーツに怪我はつきものかというタイトルで話をさせていただきます。1点目は、リラックスして話を聞いていただきたいのですが、2008年の北京五輪のときに、人工降雨作戦というものがありません。開会式や閉会式に雨を降らさないように、会場の外で、雨雲の中にロケット弾を撃ち込んで、先に雨を降らせるというものです。これを聞いたときに、すごく驚きました。雨が降るのは仕方がないことで、運動会に雨が降って延期になったら、校長が雨男や雨女と言われて、それで終わっていくのですが、まさか雨を防ぐとはどういうことだと思いました。これまで当たり前前に防げないと思っていたものを防ぐ、なるほど、すごい発想の転換だと思いました。この是非はあるにせよ、仕方がないことでさえ、考えれば防げるものだということを象徴する事例の一つだと感じました。今日はそういった話をしていきます。

私は、今話題になっている児童虐待の研究を大学院ですとずっとやっていて、その後、子供の安全

の研究にシフトしました。そうしてすぐに分かったことは、1950年代から、学校安全という言葉はずっとありますが、その1950年代以降、子供が何人亡くなっているのかという統計、エビデンスが全然ないということです。もっと言うと、この10年、5年、3年でも、子供が何人亡くなっているか、自分で集計すれば分かりますが、すぐに分かるものはありません。独立行政法人日本スポーツ振興センターが毎年出している本の中で、子供の死亡事故と後遺症、障がいが残った事故が掲載されていますが、それで終わりです。国が把握し公表している情報はそれで終わり、子供は亡くなりましたで数行だけでした。

これではまずいということで、2006年頃から、この事例をしっかりと整理し、エビデンスを作っていこうと考え、アルバイトの学生を5人雇い2か月かけて、事例1件、1件をカードに切って、貼って、分類作業をしてきました。これが過去20数年分のカードの束です。その中で、いろいろな事故が見えてきました。その内の一つに、柔道事故があります。高校1年生が柔道の練習中に、大外刈りで頭を打って亡くなっているというカードが出てきます。柔道で子供が亡くなるのだと思って、学生にカードを渡し、「柔道で子供が亡くなっているの、柔道のところに置いておいてください」と言うと、学生が、「それさっきありました。高校1年生の大外刈りの事故ですよ」と言います。最初は、同じカードを2回作ったかなと思ったのですが、カードを照合すると、年度だけ違います。そう言っていると、「先生、こっちにもありますよ」とまた出てくるわけです。

大学には新聞記事のデータベースがありますので、事故の中には、その事故がいつ起きたかをたどることができる事例もあります。いくつかの事故はたどることができ、カードと照合すると、本当にそっくりな事例が次々重なってきます。先ほどのデータは、何月に亡くなったかさえ書いてない、曖昧な情報だけなので、新聞記事と照合すると、もう少し具体的な情報が掴めます。そうすると、ほとんどの死亡事故が5月から8月にかけて亡くなっているということが分かりました。中学1年生や高校1年生が、大会に向けて練習したり、あるいは先輩の相手になったりして、受け身がとれないまま、本格的な練習を5月から8月にやっと思い、そして亡くなっているということが分かりました。

このことから、安全対策や問題点が見えてきます。柔道事故が話題になり、公益財団法人全日本柔道連盟の方でもいろいろな統計を出すようになってきました。死亡事故と重大事故の件数は、ほとんどが上半期に集中しています。初心者が頭を打たないように、受け身のトレーニングをすとか、脳震とうが起きたときに、いかにすぐに対応するかが、5件あれば本当は分かるのですが、最終的に、100人以上の子供が亡くなってやっと思えてきたという現状があります。

柔道に限らず、子供の部活動中の事故は上半期に集中しています。部活動中に事故が起きるのは皆分かっているのですが、エビデンスは、毎月のこのデータしかありません。数字等は、色々なところに眠っているのですが、活用されないまま時間が過ぎていきます。だから、エビデンスを見ながら、どこに集中的に資源を投入するかを考えなくてはなりません。予算も限られています。教員の長時間労働により、人的な資源も限られています。そうした中で、限られているものを、どこにしっかりと分配しながら、安全をより効率的に達成していくかということが求められます。そのためにも、エビデンスは大変重要です。

柔道に関しては、事故が話題になった当初、ある柔道家が「柔道は、そもそも人が死ぬ覚悟をもってやるものだ」と発言されました。話題になった直後は、残念ながら、一時的に拒否反応を示される方もいます。全日本柔道連盟が出している柔道の安全指導の資料にも、以前は、重大事故は不可抗力だということが書いてありました。なぜこのような話をするかという、今は変わったということをお伝えにきました。皆が考えれば、変わることができます。安全指導の資料も、「頭部頸部の怪我の予防をしましょう」というページが増えました。そして、マスコミが11年から12年にかけてこのことを報道してくださり、死亡事故が毎年3件から4件起きていたものが、0件になりました。非常に簡単ですから、初心者の上半期の事故を注意すればよいわけです。それで0件になります。残念ながら、2015年に福岡で頭部外傷の事故が1件起きたので、0ではないのですが、毎年のように頭を打って亡くなっていたのが、急に0件になるというように、皆が考えれば、事故は減ることを伝えたく今日は来ました。

同じことは、組体操でも言えます。これも2014年5月にヤフーニュースで情報発信を始め、今では、20から30本の記事を出しています。是非ご覧いただけるとありがたいです。1年半で、国が動いてくださいました。国が動くと同時に、自治体もあちこちで動いてくださいました。その結果、教育委員会の報告によると、例えば、名古屋市では事故が9割減っています。それ以上に大事なものは、組体操をしている学校は、2割減っただけです。つまり、皆が組体操をやっているが、安全になったということです。私は、これを目指しています。リスク研究者ですので、何でも止めるというわけではなくて、高いリスクを減らし、皆がハッピーになるにはどうしたらいいかという概念、「サステイナビリティ」と言いますが、その競技をいかに持続させていくか、犠牲の上に成り立つ競技ではなく、皆がハッピーに持続していくにはどうしたらいいのか、サステイナブルな競技種目、或いは、スポーツ活動ということを考えています。今も柔道はありますが、子供は亡くならなくなったというわけです。同じように組体操も、毎年8千件の怪我が起きていましたが、今は3千件まで減りました。子供皆が組体操をやっているが、怪我をしなくなったわけです。これこそが、目指すべき方向だと考えています。

これは、YouTubeに「安全な組体操」という動画として上げているものですが、この方は、日本体育大学の荒木達雄教授で、この方と私が一緒に組んでいるという自慢の写真です。私が啓発を始めてから1年程経ったときに、ある記者を通じて荒木先生から連絡が来まして、お会いすることになりました。お会いしたときの荒木先生の第一声が、「内田さん、ありがとうね。」でした。大変びっくりして、「どういうことですか。」とお聞きしたところ、荒木先生が学校を見に行くと巨大な組体操をやっているのを、校長先生が「どうですか、私の子供たちは。痛いのを我慢してやっていますよ」と紹介されるわけです。それを荒木先生は、「子供が痛いと言っているのを、やめてください。痛いと言っているのは組み方がおかしいし、子供たちが組体操を嫌いになってしまうので、やめてください。」とお願いするわけです。組体操を普及する人が、やめてほしいと言って帰るわけです。すごい人だなと思うと同時に、子供たちが痛い、嫌だと言っていたら、サステイナブルではありません。いかに、皆がよかったと言って、「自分の子供にも組体操を伝えたい、自分が30歳になってもやりたい」と思えるにはどうしたらいいのかと、荒木先生から学

びました。いかにその競技を続けていくかということが、大事な視点だと思います。

次は、部活動の話です。各自治体が部活動の取組をしていますので、部活動の安全についても話をしたいと思います。これは、中学生が何で廊下を走るのかという疑問を投げかけている投稿です。学校のウェブサイトを見ると、確かに、廊下を走る、階段を駆け下りています。私自身もよく廊下を走りましたが、学校では部活が始まる直前まで、「走るな」と言っていました。廊下を走れば、人や物にぶつかったり、滑ったりして危険だからです。ところが、部活が始まったたんに、急に「走るな」が、「走れ」になります。廊下の安全性は何も変わらないわけですから、事故もそこで起きることになります。なぜ廊下を走るかですが、私なりの答えを申し上げますと、制度設計がないからだと思います。例えば、体育館に4クラスの子供たちが集まって、場所がないから廊下を走るということはありません。学校は、授業ができるように環境が整えられています。ところが、部活は、学習指導要領で学校教育の一環と書いてはいますが、それ以上のことは何もありません。制度設計がありません。人、モノ、金、時間、何もない中で、学校でやりましようと言え、場所がなくなり、廊下を走ることになります。そうした中、事故が起きると「あなたがおっちょこちょいだね。」と言われてしまいます。果たしてそれでよいのでしょうか。教師が部活動を学ぶ授業は、大学では準備されていません。教育課程外だからです。大学で教える必要がありませんから、部活動の資料はありません。そして、先生たちの半数が運動部の場合は素人で、競技経験がないと分かっています。授業では、こういうことはありえません。先生が「私は、国語の素人です」と言って、国語を教えることはありません。

特に地方で多いのは、土日にある大会に子供たちを連れて行くため、自分の大きな自家用車に子供たちを乗せて行ったり、場合によっては、バスを借り切ったりしますが、そこで事故が起きることがあります。遠足ではありえません。遠足は、学校の教育課程内ですので、しっかりと運転手が付きます。先生がバスの運転免許を持っていようが、バスを運転することはありません。部活動は制度設計がないので、いろいろなことが起きてしまいます。ある県で、先生が運転した車で、子供が2人亡くなる事故が起きました。その翌年、安全運転講習会が始まってしまいます。確かに安全運転講習会は必要ですが、果たして、先生に運転させるべきだったのかどうかの問題です。制度設計がないから、そうせざるを得ない中で、皆が矛盾に矛盾を重ねながら、できることをやっているという現状です。とにかく、制度設計をしていかななくてはなりません。子供たちが部活動中、先生がそこを離れるというのはよくあります。授業中にはありません。忙しいから、今日は自習ということはありません。部活だと、先生はついつい現場を離れることもあります。そういう中で、事故も起きます。

冬山登山中の雪崩で、高校生らが8人亡くなった事故は皆さんご存知だと思います。高校生らの中に、先生が1人入っています。教員採用試験を何回も受けて、やっと合格した29歳の先生が、やったこともない山岳部の顧問につき、行ったこともない雪山登山に行き、雪崩をさっちできず子供と一緒に亡くなりました。

私は学校安全の専門家ですので、こうした事例はいくらでも出せます。これは、ハンマー投げで亡くなった事故で、顧問が帰ってしまっていた事例です。この高校のグラウンドを見てみますと、

ここでハンマー投げをやっている、ハンマーがそれ、サッカー部の生徒に当たり、亡くなっています。これがどういう意味で制度設計と絡んでくるかというと、授業用のグラウンドに無理やり競技を埋め込んで活動しているので、子供が亡くなっているということです。

2年前、東京で水泳部の調査を行ったことがあります。水泳部は、それなりに水泳ができる子供たちです。水泳でプールの底に体を打ち付けたことがありますかとの問いに、35%の子供たちが、体を打ち付けたことがあると答えています。これも制度設計と絡めて考えていただきたいです。授業用の110cmの浅いプールに170cmの子供が飛び込んでいたので、体を打ち付けてしまいます。毎年、2、3人の子供に障がいが残るという事案に至っています。障がい事例は件数があがってきますが、3か月入院して完治した事案は分かりません。そういった意味でも、毎年のように無理やりなことをして、子供が犠牲を背負っています。そして先生が非難されて、飛び込み方の手首の角度が悪かったとか、先生の指導の仕方が悪かったからと言われ、終わっていきます。その結果、子供たちが障がいを持って生きていくことになります。果たしてこれでよかったのかと問いかけたいと思っています。

本当は、110cmのプールには飛び込んではいけないと学ぶのがリスクです。川遊びでも、川の下には岩場があるかもしれないから、これは飛び込んではいけないと確認するのがリスク教育です。むしろ学校では、そこに飛び込んでしまっています。オリンピックの場合、プールは3mの水深があります。

これは、この10月に京都で起こった事案です。体育館で、管理用の廊下のところに子供を座らせ、試合の観戦をさせました。そもそも体育館は授業用ですので、観客席はないため、無理やり場所をとり、子供に座らせたら、管理用の窓から子供が落ちてしまった事故です。いずれにせよ、部活動の制度設計がない中、事故が起きています。そして、先生たちも素人なのに指導し、最終的に責任を背負っていきます。最悪の場合、県や市が訴えられ、損害賠償に至ります。制度設計をしっかりと考えれば、皆が幸せになれるはずですが。

これは、いくつかの学校の保健室の内科外科の受診状況です。8月だけありません。保健室は授業用に設置されていますので、部活動のときは想定していないわけです。子供たちが一番怪我をするとき、保健室は開いていません。そして、ファーストエイドは誰が行っているかというと、全く素人の部活の顧問、あるいはマネージャーたちがしています。非常に危うい状況です。

最後に、名古屋の事案を一つご紹介します。名古屋にある市立高校で、2011年に、死亡事故が、それ以降0件となる最後の事故が起きました。まさに典型例ですが、高校1年生の大外刈りで、初心者が頭を打って亡くなっています。亡くなったのは6月です。事故が起きたとき、校長先生が病院にすぐに駆け付け、開頭手術が終わるのを待つ間、教頭先生に「ご家族には何も隠さず、誠実にあたろう。それしかできることはない。」と、トップがしっかりと判断をされました。家族には、最初の半日ぐらいで、いろいろな情報が入ってきます。皆が、てんやわんやしている中なので、矛盾した情報が入ってくると、家族は不信感を抱きます。だから早い段階で、できるだけ窓口は一本化して、確かな情報を全部伝えていくことが大切です。その結果、なかなか遺族と学校の話合いが進むことはないですが、ここはうまく進みました。うまく進んだがゆえに、情報が

一切表に出ませんでした。私は、名古屋にしながら、この事案を3か月間知りませんでした。ところが、ちょっとしたきっかけで、この家族と出会うことになり、いろいろ話をし、その数か月後に、ご家族がマスコミに情報を出し始めました。理由は、こんな典型的な事故なら、情報を出して、皆で考えて、次の事故を防がないといけないと決断をされたからです。勇気ある決断です。この後、マスコミは家に押し寄せるので大変です。しかし、情報を出さないと再発を防げないと決断をなさいました。それ以降、死亡事故は頭部外傷で1件だけです。

いかに情報、エビデンスを集めて、皆で見て、情報を出していけば、最終的に皆が幸せになれるということです。事故はなぜ起きるのかと言えば、柔道は投げ技があるから、組体操が巨大化したからというのが答えですが、最終的な答えは、私たちが事故を見ようとしないからに尽きると思います。これでご報告を終わります。ありがとうございました。

**○事務局** ありがとうございました。データの積み重ねから得られるエビデンスに基づき、現在の制度設計がどこに問題があるのかまで踏み込んで、問題の解決にあたっておられるという話でしたが、大変ご示唆に富んだ話だったと思います。

続きまして、意見交換に移らせていただきます。ご意見のある方、いらっしゃいますか。

**○川島委員** 実は、先生の前でお恥ずかしいのですが、2週間前、スキーで転倒して右の手首を骨折しまして、今日の話にうってつけなのか、一番ふさわしくないのか、悩んでいたのですが、スポーツをしている人は怪我をする、真剣に取り組めば、怪我は致し方ないと考えがちです。私も怪我をしたときに、スポーツをやっていたのでしょがない、真剣に取り組んだ結果だから仕方ないという考えを持っていました。ですが、今日、不可抗力という話がありましたが、本当に仕方がないことなのかと、自問自答しながら先生の話聞いていました。やはり、スポーツに取り組む中で、怪我をしないための取組を最優先に考えなければならないと思います。初心者の柔道の事故という最も象徴的な事例をご紹介いただきましたが、そのレベルに合った指導や練習内容が必要で、何より大事なものは、怪我をしないといけないという指導者の認識、選手の認識をスポーツの入り口にもっていかなくてはならないと思います。一流の選手になるためには、過酷な練習が必要ですが、一流の選手の陰に、怪我や故障で競技そのものを断念しなければならなくなった多くの選手がいるはずで、怪我に対して、しっかり教育がされていたり、指導者が取り組んでいたりしたら、断念しなくてもよかったかもしれないと考えていました。

先生の話の中で一番衝撃を受けたのは、制度設計なき教育活動ということです。制度設計のある授業である体育の一環でもこういった重大事故が起きています。ましてや、制度設計のない課外の部活動においては、より顕著に、場合によっては深刻な問題になってしまいます。学校のスポーツに限った切り口で話していますが、学校周辺で行われるスポーツについても、やはりこの2つの側面からあたっていかなくてはならないと思います。特に、制度設計なきというご指摘のあった課外の部活動については、今後、学校の先生から、地域の指導者や民間の指導者に移行していこうという話もあります。公立の中学校では、どのようなことを民間や地域の方にお願

るかという中、やはり、安全に競技に取り組むために、部活動を設計し実施するという入り口のところを、学校側と指導者の間でしっかりと共通認識を持たないと大変なことになるという印象を受けました。

本来なら未然に防げる事故に対して、やはり、見て見ぬふりをし、スポーツをしていれば怪我をするのは仕方ないということが共通認識の中で見過ごされているのであれば、怪我をするのは仕方がないことではなく、怪我をしないようにすることが最も重要だと考えるようにしなければなりません。私自身そう感じましたので、今後そういう観点でお話をしていきたいと思えます。

もう一点、私なりに考えてきたことですが、企業の労働安全に対する教育は非常に徹底したものがああります。先ほど、事件事故に関して、岐阜市の中で、主なものや、その概要を、教育委員会として各校にフィードバックするという話がありましたが、多くの製造業、特に日本を代表するような製造業の多くは、工場内で事件事故があった場合、すぐに詳細な事故情報を全社に配信します。それに対する再発防止策、改善策を策定したものを同じく全社に配信しながら、事例を皆で共有し、再発防止に努める、あるいは危険予知のトレーニングに用いるなどして、全社的に取り組んでいます。学校の中で事例共有はしていますが、そういった意味では、企業の活動には及ばない部分もあるのではないかと感じておりましたので、こういった事例を集めながら、今後の安全に関する取組として紹介していきたいと考えています。

**○伊藤委員** 本日は貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。岐阜市の方からもご説明ありがとうございました。まず、先生のお話の感想ですが、素人の先生が部活動を行うことに限界があると常々思っています。名古屋で、民間への部活動の委託を進めているというニュースを見たことがあります。岐阜市の現状がどのくらい進んでいるのか分かりませんが、やはり、岐阜市内でも行っていただきたいと考えています。

今、不登校問題にも取り組んでいます。少しきつい言い方になるかもしれませんが、不登校はゼロにならないと思えますし、私は、ゼロにしなくてもいいと思っています。ただ、このような事故や死亡事故はゼロにしなければなりません。私たちも含め、漠然とした不安を常々持っているところですが、対策し、ゼロにしなくてははいけません。今、川島委員が言われたように、労災で死亡する方をゼロにしなくてはならないのと同じように、強い認識をもっていただきたいと思えます。

昭和の私たちの時代と比べ、学校を取り巻くリスクは増加していると思えますが、先日の公表会のときに、デジタルネイティブの話があったと思えます。例えば、小中学校の義務教育の課程に、SNSに関するリテラシーの教育もしていただきたいと思えます。情報リテラシーに繋がることだと思えますが、大きな影響が出てくるスマートフォン等のSNSとの付き合い方は、一時的な怪我や健康被害とはまた違った、比較できない程の学校生活や友人関係、または人格形成に影響してくると思えます。是非、そのあたりも今一度リスク対策の事業として、是非入れていただきたいと思っております。

また、夏の暑さが今後も増してくることは避けられないと思えますが、私の子供は目の調子が



悪く、他県の眼科専門の先生のところに行ったとき、夏は子供もサングラスをかけましょうというポスターが貼ってありました。昔と違って紫外線が強くなり、今後、白内障や緑内障になる方が増えていくのではないかと思います、そのあたりのエビデンスはどうでしょうか。眼科の先生の方が調べていらっしゃるのか分かりませんが、やはり、今現状で起きている事故に対する対策も必要ですが、この先、被害として出てくるかもしれないというエビデンスにも、私たちは注目していかななくてはならないと思いました。

**○武藤委員** 教育委員の武藤です。お話、ありがとうございました。先生の話聞いて、本当にちょっとしたことで、重大な事故が防げること、話を聞いていると当然だなと思うことがかなり見過ごされていると感じました。私自身も、怪我ぐらいいはすると何となく思っていたことに対して、反省しています。

部活動で、私が常々思っていることは、学校の中で、先生や、先輩と後輩の関係で、子供たち、特に学年の低い子供たちがなかなか声をあげられないことがあります。非常に危険で、痛い痛いといっている状況でも、それを言い出せない、言わずにがまんしてしまうことが、スポーツ的には美德という傾向が、まだまだ多いのかなというところが危機感を強める一つの理由になっていると思います。

岐阜市の資料の中で、子供自身の安全に関する資質能力、危機管理能力を高めるためにはという話がありますが、私は、非常にここが大切だと思います。まず、大人が、事故をゼロに抑えることを究極の目標として、色々な制度設計をしていくのはもちろん大事ですが、子供たち自身が競技をやる中で、ここまでやっては危険だと自分で考え、それを指導者なり、先輩なりにきちんと伝えて、部活の中で話し合いなどして、自分たちでリスクを回避していく資質は非常に重要だと思います。そのためには、大人自身も安全管理に関する勉強をもっとしていかななくてはならないと思いますし、それを前提に、子供たちと一緒に考えることが必要だと思います。自分の身は自分で守るという言葉もあるように、子供たち自身が安全に関することを自分のことだけでなく、周りの他の部員の子たちも含めて、それは自分たちの出来事だと考えて、真剣に議論しあえる部活をつくっていく、そういう意識の調整はすごく大事だと思います。部活動の中でも、競技自体をどうするかということだけではなく、子供たちの危機管理、安全管理という意識の面でも、取り組んでいただけるといいのかなと感じております。

**○足立委員** 内田先生には、お話いただきありがとうございました。学校の柔道や組体操の危険性をご指摘になり、実際に事故がほぼなくなってきたことに感激しております。本当に敬意を表したいと思います。学校柔道については、私の知り合いから、柔道をやって頸椎を痛めたお子さんがいるという話を聞いたことがございます。きっと、この118件の死亡事故のピラミッド型の下には、寝たきりになっているとか、麻痺で車椅子生活を送っているとか、そういう方が大勢いらっしゃると思います。そういうお子さんや保護者の方々は、どんなに悔しい思いをなさっているかと思うと、本当に今まで何をしていたのかと感じます。

私は医師をしておりますが、学校教育には、集団指導の中で、強制的にその活動を強いる側面が非常に問題だと思っています。熱中症については、去年も、何人かの方々が亡くなったわけです。スケジュールをこなさなければならぬために活動を強いるような形でやったことが死亡につながったとしたら、対策をしっかりと打っていただきたいです。熱中症対策については、暑さ指数である「WBGT」を使って今後進めていくということですが、細やかな現場の取り決めなどについても、今やらないと、すぐに夏が来ますので、是非お願いしたいと思います。幸い、岐阜市はエアコンが全ての教室に入っておりますが、体育館にはありません。授業ができなくなるわけで、その間、どういった活動をさせるのか、決められた教育課程をこなせない等、色々な問題が出てくると思います。子供の安全を第一に考えた施策をお願いします。

**○横山委員** 私も名古屋大学に勤務したことがございますので、今日、内田先生にお会いできて感激しております。先生の話聞いて思ったことは、色々事例がありましたが、起こるべくして起きているものばかりだと思いました。限られたグラウンドの中で、当然起こり得ることだと改めて思います。指導の経験のない教員が部活を担当する話がありましたが、私も中学校時代、野球をあまり経験したことがない先生が野球部の顧問になったことを思い出しました。どういった点が、このスポーツで危険なのか等、なかなか分かりません。内田先生の話聞いていて、起こるべくして起きているものがかなりあることを改めて認識しました。そして、それはどういうことかということ、やはり、子供の安全安心と言いながらも、まだ踏み込んで検討ができていないのではないかと、もっと認識を高めないといけないのではないかとということも改めて思いました。

少し先生にお尋ねしたいのですが、事故がなくなった理由の一つとして、組立体操をやめました、あれはなぜ減ったのですか。

**○内田准教授** 簡単に申し上げますと、高い段数をやめました。ただそれだけです。国があまり細かいことを言うと教育権の介入となりますので、安全にきなさいと通知を出し、各自治体で、特に巨大化している自治体は段数制限を設け、ピラミッドは5段まで、タワーは2段か3段までという形になり、事故がかなり減りました。

**○横山委員** 資料に協議いただきたい事項とありますので、私もその観点で整理させていただきます。因子が2つに分かれている中で、その対応として、大きな取組は、やはり、教育委員会として未然に防ぐための環境整備が求められますし、併せて、子供たちが危機管理能力をいかに高めるか、その2本柱がしっかりできることで、安全対策が進みます。これは、皆さん方も言われたことだと思います。

そういう点で言えば、岐阜市は、登下校時の安全安心対策として、色々検討されていると聞いています。そうした環境整備と併せて、子供たちの危機管理能力、意識を高めるにはどうしたらいいか、併せてやっていかなくてはならないと思います。それをやるには、どういったことを学ばせるかという学習プログラムが大事だと思います。先生の話に、情報を集めるという言葉が

出てきました。子供が身に付けやすいものであるには、どのような教育プログラムを組んだらいいかを考えた場合、危険な目にあったけれども、未然に防げた事例が全国に多数あると思いますので、そういったものを教材にして子供たちに学ばせるとよいと思います。事例をうまく、たくさん集めて、子供たちに体験的に学ばせる、そうした学習プログラムがあるとよいと思いました。

それから、岐阜の小中学校長会で昨年話をし、優先的に考える課題は何かとお聞きした際に、ネット犯罪のことが上がりました。情報活用能力を高めると同時に、セキュリティ教育も併せてやっていかななくてはなりません。情報活用能力を高めることは学校でできると思いますが、危険に対する備えは学校だけでは限界があります。学校や家庭、地域、コミュニティ・スクールが主体になってやる必要があるのではないかと思います。そのあたりも先生にご意見いただければと思います。

**○教育長** 教育長の早川です。おそらく、ここにいる校長先生も、私もそうですが、1日終わって今日は何もなくてよかったなと床に就くと思います。祈りにも似た気持ちです。例えば、子供が長距離走をやっている倒れた場合に、AEDがすぐ使える体制になっているとか、使うのが遅れて問題になったりしないとか、アレルギー対応の場合は、エピペンを持っているのに躊躇したりしないか、しっかりと対応できるかどうか重要です。校長先生も、自分の学校の児童生徒に対して同じ気持ちだと思います。しかし、一旦不幸な出来事が起これば、必ず原因があり、防ぐことはできたはずで、組織的な責任となります。それに関わって、今日ご指摘があったように、事故を見ようとする、ぼんやりしたところがあるのは間違いないと思います。

例えば、教員の不祥事があれば、我々はそれに対して、記者会見でどんな話が出たか、保護者会でどんな話が出たか、私どもが校長会で説明し共有をします。学校で起こった事故に対しては、お互いに情報提供をしますが、教育委員会が詳細に伝える教員の不祥事ほど、おそらく流していません。もっとお互いに詳細な情報をもって教訓にしていく作業をしていく必要があると私は強く感じました。

子供自身が事故に対する感性を身に付けるというのは、防災教育にもつながります。人生の防災教育だと思っていますので、そのあたりは、きちっと気を引き締めて、いろいろな危険性についてお互いに学び合って、先生が子供に伝えていくことも重要な作業だと思います。今日は柔道でお示しいただきましたが、この時期にこういう状況で危険度が増すと、データを見ようと思えば見られると思います。そういった作業も、特に大学等の研究機関と協力して、データの分析をやっていけるとよいと思いながら話を伺いました。

**○柴橋市長** 内田先生、ありがとうございます。20年程前、私は軟式野球部でしたので、硬式野球部と背中合わせに練習をしていたことを思い出します。中学校の時はショートをしておりましたので、硬式野球部のセンターとお互い目が合い、状況もだいたい想像つきます。打球が飛んでくると察知しなければなりませんから、外野手の動きを見て、打球の音を感じながら、後ろに目をつけて、守備をするという感じです。当たったことはありませんでしたが、先生が仰ることは、

全国でそういうことがあり、私の場合は不幸なことはなかったですが、どこにでも危険が潜んでいるということだと思います。

そんな中で、ハード整備のことは先生も仰らなかつたですが、例えば、グラウンドは限られており、拡張するのは課題が多いです。おそらく、運用面でしっかり安全を確保することが大事であると思います。そこで先生に教えていただきたいのは、一つの基準を作るにあたって、全国的に見たときに、教育委員会で一律に基準を定めて、それを学校現場にやっていただくやり方なのか、学校現場には裁量、独自性もあるので、校長先生を中心に、いろいろなことをそれぞれの実情に合わせて考えるのがよいのか、是非教えていただきたいと思います。

**○内田准教授** 数々の貴重なご意見ありがとうございました。いくつかまとめてご回答申し上げます。

まず、柴橋市長が仰った部活の運用面に関してですが、一つ言えることは、ハードの整備が大変だということはそのとおりです。私が考えているのは、例えば、部活を縮小しようという動きがありますが、中学校の場合、週6日以上やっている学校が半数程あります。それを週3日に減らしたとします。月水金を野球部、火木土をサッカー部とすると、廊下を走らなくて済みます。グラウンドをめいっぱい使えます。場所、先生、外部指導者もそうですし、先生の専門性もそうですが、全く足りていませんので、日数を減らして、限りある資源をどう使っていくかが重要です。なぜ、今ある規模を維持しなければならないのか。その結果、何人も犠牲になって、その上で巨大な部活動が成り立っているのなら、私は、そういう部活動はない方がいいと思います。ある程度縮小し、皆がハッピーになれることが大事です。どうしても全国大会に行きたい人は、民間のクラブチームで育ててください。実際にそういったトップアスリートは山ほどいます。そういった意味で、学校の部活は縮小する、これは予算がかかりません。グラウンド拡張はお金がかかりますが、縮小して週3日の部活で回していけば、専門的な指導者や場所も得やすいです。子供も怪我をしないし、それによる訴訟等も起きにくくなります。そういう設計が、運用面でいろいろできるのではないかと考えています。

教育委員会が主導すべきかどうかですが、部活動には制度設計がありませんでしたので、そういった意味では、多少、主導してもそれが教育の自立性を損なうことにはならないと思っています。むしろ、制度設計をしなくてはならないのではないのでしょうか。実際に授業では、先生は、50分の中で最大のパフォーマンスを発揮するというのを考えます。ところが部活動になると、倒れるまでやり続けて最大のパフォーマンスを発揮するということですが、そうではないと思います。限られた時間の中でパフォーマンスを発揮すべきなのは、部活動でも同じです。週3日の中で、最大の教育的効果を発揮する。子供と絆を結びたいなら、3日で結んでください。試合に勝つにも、皆が週3日の中でやれば、それで試合はできます。上限規制をした中で、皆がどうやって運用していくかを考えるべきだと思います。

そういう意味で、スポーツ庁や文化庁がそれぞれ運動部、文化部のガイドラインを今年出したのですが、まさにそれは制度設計で、上限規制だと思っています。週5日まで、1日2時間までと

というのは、まさに上限規制で、制度設計の典型例であり、そういった意味でも、国が制度設計を  
しなさい、上限規制をしなさいと言っているので、皆がそれに乗っかっていくのがいいと思いま  
す。最初は抵抗があります。部活で頑張ってたよかったという声を聞きますが、やはり、10年、20  
年先を考えたときに、縮小に向かって動いた方がいいと考えます。

気を付けなくてはならないのは、先ほど、何人かの委員からご指摘があった部活の外部化です。  
外部化していくと、より制度設計がゆるくなっていきます。学校の管理がだんだん行き届かなく  
なります。外部指導者を先生が個人的に呼んで、外部指導者が指導し、教育委員会がそこに手  
を出せないこととなります。これから起こりうるし、実際に起きています。外部指導者だと管理が  
できない分、非常にやっかいなので、なおのこと規模を縮小し、質の高い外部指導者を入れると  
いうことを設計していかななくてはなりません。外部指導者の導入は、慎重に進めていかななくては  
ならないと思います。

2点目は、先ほど川島委員と伊藤委員から、労働災害・労働安全衛生の話がありました。これ  
は本当に大事だと思っています。実は、学校の先生の長時間労働は異常事態です。先生自身が、  
自分たちの労働安全衛生に非常に無頓着だったということがあります。私は、先生の労働安全衛  
生をより積極的に進めていくことは、子供の安全に繋がっていくと思います。先生だけ非常にゆ  
るくて、子供だけ厳しいという空気はありません。自分自身をしっかり守れるから、子供も守れ  
るというのが、おそらく学校の空気として必要だと思います。そういう意味では、労働安全衛生  
をどうやって徹底していくかは、教育委員会、あるいは自治体に求められる姿勢だと思います。

なぜ、このようなことをお話したかと言いますと、私がこの半年申し上げているのは、非常に  
大きな反省点があったからです。これまで、ずっと子供の事故のことをやってきて、先生たちに  
研修してください、子供を守ってください、こういう資料がありますので、読んでください、と  
先生の仕事ばかり増やしてきました。子供の安全は、先生の仕事をいやおうなく増やします。「子  
供の命ですよ、先生！」と言ってきました。私はなんてひどいことをしてきたのかと思っていま  
す。

もちろん、子供の命を守ることは大事ですが、それで先生が倒れていき、そして最終的に子供  
が守れますかという問いをたてなかった。限りある資源の中で、どう子供の安全を達成するかと  
いうときに、先生も元気でなければなりません。ある先生は「毎日、小学校の先生は忙しすぎて、  
子供のノートもぱっと開いて、丸を付け、ぱっと開いて、丸を付け、子供のSOSがあったときに、  
私は見逃しているかもしれないので、すごく怖いです。」とっていました。ノートは1日以内で  
返さないといけません、とても多忙な中で、いじめが起きる、自殺が起きるとなったら、「先  
生、何をやってたのですか。ノートに丸を付けているだけではないですか。」と非難されます。  
そういった意味で、子供の安全を言えば言うほど、先生の仕事が増えていきます。そういったと  
きに、労働安全の観点から、どうやって先生自身の子供に向き合う時間を確保するかも一緒に考  
えていかななくてはなりません。それが、これから先の非常に大きな課題です。これから教員の働  
き方改革が、実際に下りてきますので、先生の働き方をどうしていくのかということと一緒に考  
えていくことが必要になると思います。

そして、ネット社会の危険性ですが、これは仰るとおりです。ネット社会というのは、結局、子供一人ひとりが、家にいようが、学校にいようが、グローバルに誰でも繋がるとというのが、ネット社会です。これまでは、常に学校や家庭というフィルターがあって、外に繋がっていたのですが、グローバルにどこにでも繋がります。これがネット社会の非常にいい点であり、恐ろしい点でもあります。では、この新しい時代にどう向き合っていくかですが、これは非常に難しいです。学校はご存じのとおり、IT化、ICT教育と言いながら、学校自身がそうではありません。メールさえ使っていない先生が山ほどいます。そういう中で、おそらくネット教育は、先生に任せられないと考えます。それこそ、専門家を呼んで、話してもらった方が早いと思います。これも、先ほどの労働安全衛生とリンクする発想ですが、常に先生の負担を増やさずに、どうやってうまく回していくかを考えることが必要になっていくと思います。

最後に、紫外線についてですが、サングラスもそうですし、日焼け止めを塗ってはいけないという学校も未だにあります。家で塗ってくるようにと言われますので、汗で落ちてしまわないように、一番強烈なものを塗って学校に行くわけです。そちらの方が肌によくありません。また、昨日聞いたことは、子供がトローチをなめたいと言いましたが、許可したら、皆が飴をなめるから駄目だと許可されなかったと聞きました。まずは、安全ベースで考えていかななくてはならないのですが、足立委員が仰ったように、皆で一緒にやるということが先にあります。子供も先生も、まずは安全を起点に考えていくところから、学校文化を再構築していく必要があると思います。一斉指導の方向に向かうのは、楽だからです。のど飴はだめだと言えば、それで終わります。多忙な中だからであって、ゆとりがあれば、先生がそれを選択できます。先生が子供の安全に向き合うためにも、時間確保が必要だというのが、この半年の私の大きな課題です。それこそ、サングラスの使用も含めて、全く実態が分かっていません。子供の目の保護、肌の問題、エビデンスがないときは、一つの学校のエビデンスだけでも貴重です。ですから、皆さんに負担にならない形でエビデンスを集め、情報発信していくということも、全国的にもこれから必要になってくると考えます。

**○事務局** ありがとうございます。委員の皆様、ご意見等ございますか。

**○横山委員** 部活の話ですが、一方で、大規模な大会では勝つことが重要視されます。そういう中で、どのように方向性として収めていくかということはなかなか難しい部分があると思います。

**○内田准教授** 回答にはならないかもしれませんが、情報としてお伝えしたいのは、実は、2、3週間前に、全国高等学校体育連盟の最もフォーマルな全国大会に呼ばれました。来賓の挨拶等が終わった直後に私が話をするという、3年前では信じられない事態が起きて、まさに今日お話ししたようなことを話しました。その後、先生の話は本当によかった、変えて行きましよう、大いに盛り上がりました。

これまでは、勝つために頑張ってたっくさん練習をするという常識でやってきましたが、皆が考

え始め、全国高等学校体育連盟も全国大会でそこに向き合ってくれました。これから議論が進んでいくと思います。そういった意味でも、皆が言い続けることが大事だなと改めて思いましたし、10年後にはもう少し事態がよくなっていると思います。

**○川島委員** やはり、大会で勝つために、競技力を向上させることが免罪符になって、無理をしまい怪我や故障に繋がることも、先ほどの発言の中で話をさせていただきました。しかし、工場等の現場を持っている企業では、安全がすべてに優先すると書いてあります。企業にとって利益は重要ですが、利益を最大化するためには、安全が最大化されなければなりません。重大な事故や事件があれば、優先させたはずの利益が、結果的には利益にならないことになるので、企業では安全がすべてに優先します。

私は、競技も同じだと思います。特に、ジュニア・シニア・高校生頃までは、まだまだ育成段階で、競技人生の初期の段階です。将来的に、アスリートとしてやるにしろ、生涯スポーツとしてやるにしろ、そこですべてを出し切ったり、怪我や故障をしたりしてキャリアを失う必要は一切ないと思います。ですから、大会において責任ある立場の方や、日々の指導者が、様々な場で、安全がすべてに優先されるということを明確に話し、その上での大会であり、その上での競技力向上であることを伝えていかなければなりません。スポーツの切り口で話しましたが、学校全体で、安全がすべてに優先すると宣言することによって、それに基づいて、制度や運用が個別に検討されていくことが大事だと思います。

**○内田准教授** 本当に仰るとおりで、安全をベースにした上で教育活動を設計する必要があります。人、モノ、場所、金等の資源制約を元に、制度を運用、設計していくことが必要です。部活動に関しては、今まで、頂点にすごい選手が出てくるという発想で、全国大会を頂点にした大きなピラミッドをつくっていました。安全優先や、もう少しゆとりのある学校生活という意味では、トップアスリートは専門家のところで育ててはどうでしょうか。当然、そこはトップアスリートの指導者なので、安全指導もしっかりしています。学校の部活動は縮小して、ゆとりある資源の中で指導していけば、安全もある程度確保できると思います。今まで部活動は、コンクールに出る、大会に出る、そして勝つ、という考え方でしたが、大人がやっているように、草野球でも、あるいはテニスでもいいですが、勝っても負けても皆が笑っているような機会を子供たちに保障すべきだと思います。

もちろん、試合はやった方がいいです。試合のないスポーツはつまらないです。年に1回、岐阜市内だけであるとか、それ以外の交流会のようなものにしておけば、2か月前頃からは盛り上がるかもしれませんが、それ以外の期間は、皆で楽しくその競技をして、30代になってもやりたいと思ってくれることが必要だと思います。私の大学にも、スポーツができる学生がたまに入ってきます。でも、部活には入りません。サークルも入りません。理由を聞くと、もういいですよと言います。うちの教育学部には、頑張って全国大会に行きかけた子供も入ってきます。でも、もういいですよと言います。教育者として、こんな悲しいことはないです。全然、サステイナブル

でないと思います。やはり、いかに自分が身に付けた能力を生かしていくかを考えたとき、サステイナブルを考えます。そのための制度設計は、安全をベースにしか成り立ちません。

**○武藤委員** 内田先生に知見をお伺いできればと思いますが、どうしても部活は、子供たち自身、勝ちたい、成績を上げたいと頑張ってしまう。先生がそれを止めきれないということもよくあると思います。そうすると、子供たち自身の危機管理等も、非常に重要な要素だと思いますが、そういった能力を子供たちに身に着けさせるために、こういう対策があるという先生のお考えがあれば、お伺いできればと思います。

**○内田准教授** 子供たちに危機管理能力を身に着けさせる方法ですが、これまで部活動の時間は、競技そのものをやってきました。座学は部活にはありませんでしたから、部活が6日もあれば1日ぐらいは座学で、指導の在り方や怪我に関するビデオを見て学ぶ機会があるとよいと思います。そうやって座学を入れるだけでも場所が少し空くわけです。そういう意味でも座学が必要だと思います。それこそ、安全面を考えるには座学、あるいは競技の特性や歴史を学ぶことで、その競技をすることが楽しくなると思います。学校教育だからこそ、そうした原点に立ち返って、やってもらえるとよいと思います。

子供の勝ちたいという思いや、ときには保護者が学校にプレッシャーをかけます。部活の先生が「土日の活動をやめます。」と言ったときには、確実に、やりたい子供や保護者からの圧力があり、校長も屈してしまいます。しかし、「土日は部活をやりません」と教育委員会から通知が出されれば違います。極端に言うと、今は難しいにしても、運動会を半日だけにするとか、学級通信の発行は週1回だけにするというのを、教育委員会からの通知によって保護者に理解を求めると、保護者もなかなかクレームが言いにくくなってきます。そういう形で、できるだけ、先生一人ひとりに任せない形で上から伝えていくと、いろいろな改革が進みやすいと考えます。

**○武藤委員** まず、子供たちが考える時間をしっかりと取ることが大事です。学校でも、子供たち自身が考えながら進めていく活動が、いろいろな分野で盛んになってきていると思います。その発想は、部活にも応用が十分効くのではないかと思いますので、是非、学校現場でそうした観点を部活に取り入れて、子供たち自身で考える力を高めるということを実践していただきたいと思いました。中学校の公民の教科書の始めの方に、グラウンドの使い方を決めるというものがあったと思います。そういうことを考える場は、学校教育の中でも、すでに十分提供されていると思いますので、部活や課外の活動などを連携させながら進めていただくと、限りある時間の中で最大限の効果が出ることに繋がっていくと思いました。是非、各学校現場においてもやっていただき、教育委員会の方からも、具体的に考えてほしいということであれば、協力させていただければと思いました。

**○事務局** ありがとうございました。そろそろお時間が迫ってまいりましたが、ご質問等ござい



ましたら、いかがでしょうか。私から、1点お伺いしたいのですが、これから顕在化・深刻化してくる学校を取り巻くリスクについて、何かご示唆いただければと思います。

**○内田准教授** いくつかございますが、今すぐに思い付いたものを申し上げますと、教員の働き方改革に関して、中央教育審議会のまとめが出て、これから各自治体が動いていきます。その中の主要な項目として、教員の労働を減らしましょうとあり、減らすための手段の一つとして、部活を含めて外部化していこうとあります。例えば、登下校時の見回りを地域住民や保護者に任せましょうという内容が入っています。これまでの私の感覚では、「先生、大変ですね。」と、この2年間盛り上がりました。これまで、教員バッシングの歴史でしたが、この2年間は、教員は大変だという世論が盛り上がりました。しかし、仕事の外部化の話が出てきたころから、保護者や地域住民が、自分たちが忙しくなると気づき始めたわけです。そうすると、急に従来の教員バッシングに戻ってしまう可能性があります。誰も、この教員改革に賛同しない時代が間近に来ているのではないかと危機感をおぼえています。

もちろん外部化はしないとはいけませんが、外部化どうこうというだけではなく、いかに学校の仕事をなくすか、運動会を半日にするとか、学校行事を減らす等、大幅に減らすしかないと思います。保護者も楽しくなくなるというかもしれませんが、保護者の仕事を増やすわけではありません。これからの改革で、保護者や地域住民のネガティブなリアクションが起こり得ます。変なリアクションを受けて頓挫してしまわないよう、どのように答えていくか今のうちに考えておかなければなりません。

**○横山委員** その点から言えば、岐阜市には、コミュニティ・スクールがあるわけです。外部委託と言うか、連携ということで、その核は岐阜市の場合はコミュニティ・スクールです。コミュニティ・スクールをより実質化することで、いい方向にいくと思います。

**○内田准教授** コミュニティ・スクールは有効な手段だと考えます。

**○事務局** 最後に市長から一言ございますか。

**○柴橋市長** ありがとうございます。毎回ですが、実り多いたくさんのことをご示唆いただく会議になったと思います。特に、最後に学校行事を減らすことをご提言いただきました。これは今、人口減少や高齢化が進んでいる中、いろいろなところで、今までのスペックや量で、そのまままきっているものがたくさんあります。これを、どのように持続可能な形にしていくかは、ありとあらゆる分野の課題だと思います。今回、学校の問題が顕著でタイムリーだということで、たくさんのご示唆をいただきましたので、今後、教育委員会や学校現場の皆様と協議しながら、方向性をしっかりとつくっていきたいと思っております。今日はありがとうございました。

**○事務局** ありがとうございました。それでは、これを持ちまして平成30年度第3回岐阜市総合教育会議を閉会します。

(15時00分閉会)